群山の近代文化都市開発事業

金 中奎

●はじめに

朝鮮半島の南西部、全羅北道にある群山（グンサン）の盛衰は海と深く関わり、水路を利用した港として発展を続けてきた。二〇世紀初頭、群山港に押し寄せた近代文化は、独自の近代化ではなかったことから限界を迎え、衰退の一途をたどることとなった。

一九七〇～八〇年代の大韓民国の経済発展にも関わらず逆に低迷期を迎えていた群山は、皮肉にも全国で最も近代建築が多く残る都市となり、今日でもその文化資源を観光、教育に用いようと様々な角度からその方法を模索している。

群山市は二〇〇八年に、全国一の近代文化遺産を用いて旧市街を活性化させる事業に着手し、旧群山港とその一帯にある蔵米洞、永和洞、中央路、月明洞などのいわゆる旧市街において、着手から八年で観光客誘致による地価の上昇と商業圏の復活という快挙をなし遂げた。特に「近代文化都市開発事業」（以下、「近代文化事業」）の先駆けであり、近代文化事業のいわば案内役として建設された群山近代歴史博物館は、二〇一一年九月三〇日の完成から四一カ月後の二〇一五年二月七日に、来場者が一〇〇万人（無料入場期間二九万四三三六人、有料入場期間七〇万五五五四人）を突破し、全国二〇三カ所の公立博物館のうち優秀博物館五選に選ばれるなど、群山の近代文化事業をリードしている。

また、二〇一三年の国土交通部が主催した「景観大賞」での大賞受賞や、国連ハビタット、アジア景観デザイン学会、福岡アジア都市研究所主催の「アジア都市景観賞」を二〇一四年に受賞したことからも、博物館をはじめとした群山市の近代文化事業はある程度の安定期に入ったといえる。

●近代建築物を歴史文化遺産という観点からみる

群山の近代文化事業に、群山市と市民が関心を持ち、開発計画が始まったのは、恐らく一九九五年の金泳三（キムヨンサム）大統領在任時代に推し進められた植民地残滓清算事業からではないかと思われる。

ソウルの大韓民国中央庁舎（旧朝鮮総督府庁舎）の撤去に始まった植民地残滓清算事業の影響で、全国各地にある植民地時代の建築物と記念物の撤去作業を推進した時期に、群山もまた当時の群山公園に残っていた報国塔、孔子廟、慈雨恵民碑、開港三五周年記念塔などの撤去が決定した。しかし、撤去のための諮問委員会において、植民地時代の建築物については近代文化遺産としての保存の必要性が提起され、話し合いの結果、撤去後に廃棄物を保管するという形をとることになり、これが群山で近代遺産保存が一般化される最初の事例となった。当時撤去された資材は、現在、群山近代歴史博物館で保管・展示されている。その後、韓国政府も日本植民地時代の歴史も我々が忘れてはならない歴史であるという認識のもとに近代文化遺産の保存の必要性を理解し、二〇〇二年に文化財庁で登録文化財法を制定して近代文化遺産の保存についての制度的支援が決定されたことにより、新たな転機を迎えることになった。

1920年代の群山港全景

群山近代歴史博物館

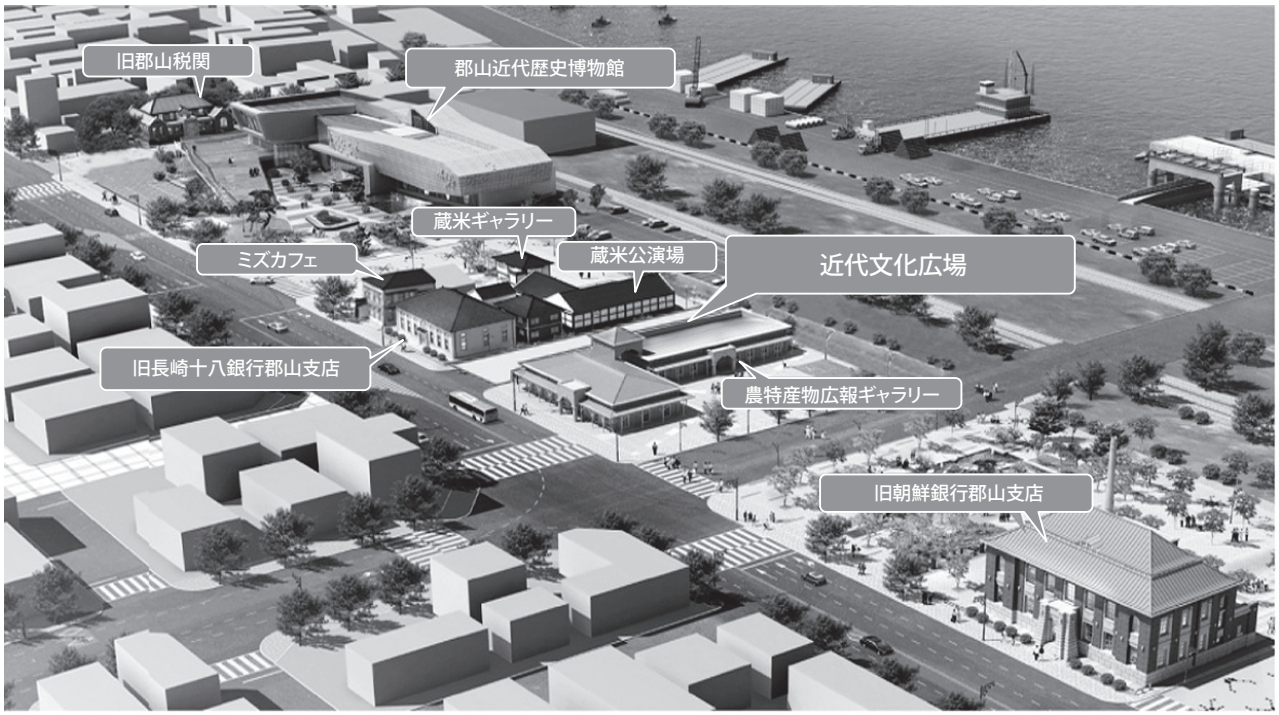
旧長崎十八銀行

旧朝鮮銀行群山支店

筆者が群山で初めて群山東国寺の登録文化財申請を行った二〇〇三年当時、住職は笑いながら、一九九五年の植民地残滓清算を生き残ったことも奇跡なのに、何が文化財の申請だ、と否定するように手を振る仕草をしたことが思い出される。しかし、東国寺は全国唯一の日本式寺院としての価値が認められ、国家文化財に指定された。それ以降、群山では群山開井面旧日本人農場倉庫、群山新興洞日本式家屋、群山海望窟、群山旧第一水源地堤防、群山臨陂駅舎、旧長崎第十八銀行群山支店、旧朝鮮銀行群山支店、群山於青島灯台、朝鮮食糧営団群山出張所など一〇カ所が登録文化財に指定され、これらとは別途に旧群山税関、李永春（イヨンチュン）家屋なども全羅北道指定文化財の指定を受け、歴史文化遺産として保存・管理されている。

●近代歴史文化遺産を観光資源に

群山市が近代文化遺産を活用した近代文化事業を本格的に始めたのは二〇〇八年度からである。それまでの単体中心の文化財保存事業が変化を遂げたのは、当時の李明博（イミョンバク）政権が最初の公募事業として



群山近代産業遺産文化芸術ベルト化事業の位置図

2014年 博物館に列を作って入場する観光客

推進した「近代産業遺産文化芸術ベルト化事業」（以下、「ベルト化事業」、筆者は当時事業を担当）に「一九三〇年への時間旅行」というテーマで事業申請をしてからといえる。このベルト化事業として、群山市は税関、長崎十八銀行、旧朝鮮銀行群山支店を連携させて近代建築物を文化芸術空間として活用する事業構想を提出したところ、全国二六の申請自治体のうち一位を獲得した。

当時、すでに群山近代歴史博物館の建設計画が進められていたが、ベルト化公募事業に選定されたことによって予算の確保という基盤を得ることができた。それに加えて全羅北道で推進する一市郡一プロジェクト事業において「近代歴史景観開発事業」が選定され、群山市は近代文化資源の開発というひとつの目的で大規模な三つの事業を同時に推進するチャンスを得ることになった。

当時の事業の基本計画は、内港、蔵米洞、近代歴史博物館を一次完工、さらにベルト化事業地区を二次完工させて近代文化拠点を開発することにより、これを足掛かりに旧市街の月明、中央、新興、永和洞に近代歴史景観を整備し、旧市街全体を近代文化都市として開発するという計画であった。この計画どおり、ベルト化事業は二〇一三年六月に完了し、ミズ商事はカフェテリアとブックカフェとして、内港倉庫は蔵米ギャラリー、大韓通運倉庫は蔵米公演場として、長崎十八銀行群山支店は近代美術館、朝鮮銀行群山支店は近代建築館として整備され、現在では近代歴史博物館と連携して文化芸術体験と土曜常設公演を開催している。

また近代歴史景観開発事業は、第一段階として近代建築物が集まった五九二〇平方メートルに近代歴史体験エリアを造り、近代歴史探訪路を整備するために民間から宅地二ブロックを群山市が買い上げ、二〇一三年に宿泊体験館五棟と近隣に販売施設四棟が完成して民間事業者が運営中である。さらに二〇一四年にも宿泊体験館一棟と近隣施設四棟が完成し運営を開始している。

その他にも、文化体育観光部から予算の援助を受けて推進した「一九三〇年への近代群山時間旅行事業」は、近代文化事業のストーリーテリング開発、探訪路区間の景観改善、グルメ通りの整備事業について、現在、案内板の整備と建物の外観整備を推し進めている。

群山の近代事業は、現在までに基本事業を完了してインフラ構築および運営システムを整備し、文化資源を活用した旧市街の開発と都市再生という事業方針の面で、関係各方面から注目されている。

●全国的な旧市街活性化の成功例

近代文化都市開発事業の第一段階（二〇一四年まで）完了にともなって、事業に関連して様々な評価が寄せられている。根本的な問題点と改善案が明らかになるには第二段階の完了を待たねばならないが、現在までの結果を踏まえて現場で確認できる事業の成果を整理してみると、第一に旧市街（月明洞、永和洞、蔵米洞）の転出者数が減少したことである。二〇〇八年以降、月明洞を中心として毎年転出者数の著しい減少がみられた。

第二に、他地域からの訪問客の増加が挙げられる。訪問客の数が正確にわかる群山近代歴史博物館の場合、二〇一三年には二二万人が来館したが、二〇一四年には四一万人が博物館を訪れ、そのうちの大部分が旧市街にある東国寺と新興洞日本式家屋（広津家屋）、映画『八月のクリスマス』の撮影地である草原写真館などを必ず訪れたことが調査から明らかになり、博物館ベルト化地域を拠点として旧市街を活性化させるという事業計画が、ある程度成果を上げていることがわかる。

第三に、旧市街地域の不動産の変化がある。近代文化都市開発事業が推進されている月明洞、蔵米洞、永和洞一帯の不動産価格は二〇〇〇年以降、毎年下落を続けていたが、二〇一四年七月を起点と

近代歴史景観開発事業（左、右）

して高騰が続き、不動産投資の過熱の兆しさえみられるほどである。このような変化による地域の商業圏の活性化と共に、旧市街地域は人の往来が絶えない躍動感あふれる街へと変化を遂げている。

●近代文化事業の成功要因

群山市の近代文化事業はまだ中間段階であるとはいえ、肯定的な評価を受けている要因はいくつかある。主観的ではあるがそのうちのいくつかを挙げてみると、第一に観光スタイルの変化がある。これまでの自然景観や慶州・扶余中心の古代歴史から、追憶をベースとした近代の旅行へという志向の変化が、多くの旅行客を群山へと呼び寄せたといえる。

第二に、群山の密集した近代文化資源が挙げられる。近代資源は仁川や木浦など韓国の他の都市でもみられるが、群山のように一五分から三〇分圏内という、散策に最適な距離にあるのは群山の強みである。

第三に、今までこれといった観光資源がなかった群山の弱みが、むしろ官民一体となり何かをなし遂げようという雰囲気を作り出し、こうした推進への熱い気持ちが大きな原動力になったといえる。

最後に、先に述べたすべての成功要因があったにしても推進が難しい事業が成功した最も大きな要因は、群山市長がみせたリーダーシップである。二〇〇六年、群山市長に就任し、旧市街地の開発を近代文化事業として推進しようと決定し、現在に至るまで八年間、終始一貫して事業を推進している文東信（ムンドンシン）市長の情熱と決断がなければ、近代文化都市開発事業の現在はなかったであろう。

さらに群山の成果は、表面だけをみて観光マーケティングの成功事例ということもできるが、その裏には多くの人々の不断の努力と物流港湾都市として群山が歩んできた数百年の伝統文化が蓄積された結果であることを見逃すことはできない。また、群山近代文化事業の根本は、観光でもなく、文化でもなく、歴史でもない、そのすべてを含む教育事業であることを忘れてはならない。近代の収奪と痛みの歴史を若者たちに教える空間としての役割は、全国的にみても群山だけが可能なのである。

●事業推進の課題と希望

近代文化を中心とした政策を樹立するにあたって避けて通れないのは、近代文化遺産保存の先頭に立つ日本やヨーロッパの場合、近代文化は繁栄の歴史であるが、韓国や中国など帝国主義時代の被害国家にとって、近代文化は国を奪われた屈辱の時代に作られた文化であるという点である。つまり、韓国での近代文化事業には歴史の陰の部分が存在するということである。

群山市の場合、近代建築物、近代文化という単語のイメージから連想される植民地残滓という影を消し去るために、文化の多様性、近代歴史教育というキーワードを重視している。それに加え、筆者の主観ではあるが、近代期の痛みを癒すためには、事実から顔を背けて沈黙や歪曲で解決しようとするのではなく、韓日両国が共に反省と許しの過程を経て、平和というテーマに向かって進んでいかなければならないと考える。

（きむ　じゅんぎゅ／群山近代歴史博物館長）

（写真と図はすべて群山近代歴史博物館提供）